

「SpicyLibracs ver5.5」バージョンアップの説明

2011年10月15日

2011年12月1日

有限会社スパイシーソフト

本説明書においては、2011/10でのバージョンアップ内容に、2011/12でのバージョンアップの内容を付け加えています。

【機能追加】

① 段落追いつみ処理

従来、段落追いつみ処理は、テキストフレームにオーバーセットがあった場合にのみ有効でしたが、テキストフレームにオーバーセットがない場合にも、1段落を1行に強制的に収める段落追いつみ処理機能を追加しました。

設定は、文字挿入のパラメーター設定ダイアログの、「あふれ処理」を指定するコンボボックスにて、

- 未あふれ時でも、段落を1行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1行で収まる段落に対しても、同じ率での扁平処理を行う。

- 未あふれ時でも、段落を1行に強制的に収め、複数段落ある場合には、1行で収まる段落に対しては、扁平処理を行わない。

のいずれかを選択することで行います。

② UNICODE 変換

従来、UNICODE 変換で変換先文字として設定できる文字は、2バイトのUNICODEを割り当てられている文字に限られていました。

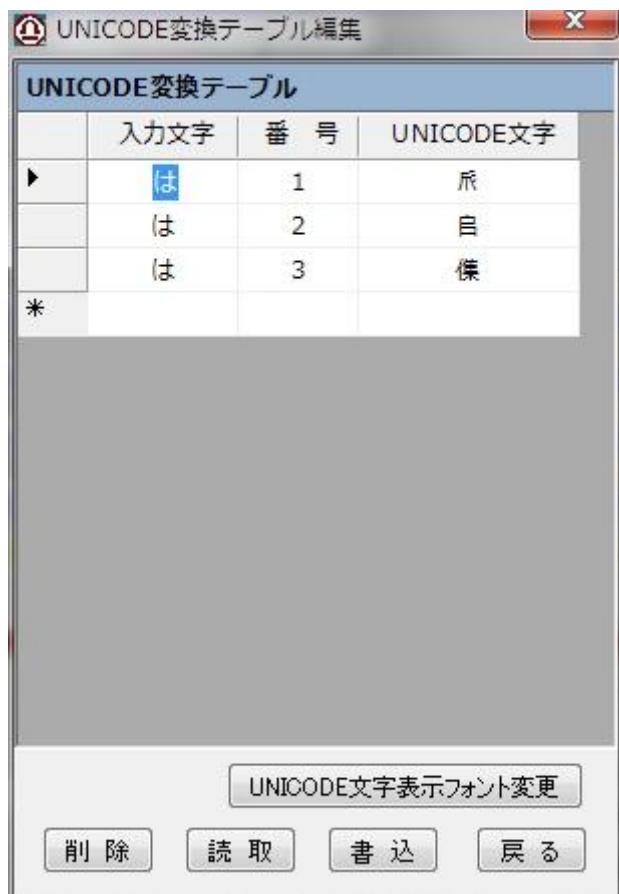
例えば、いわゆる「土吉」と呼ばれる吉の上部が上線の長い「土」ではなく、下線の長い「土」の文字は、俗字であるため内字としては利用することができませんでした。

しかし、UNICODEの拡張で2バイト文字としてではなく、4バイトの文字コード(サロゲートペア)としてコードが割り当てられました。ところが、4バイトであるため、SpicyLibracsにおいてはUNICODE変換テーブルに入力できず、SpicyTag及びカスタム人名字取のみでの対応となっていました。

今回、変換先にUNICODE文字を4バイトのサロゲートペア文字を設定できるように拡張しました。

ただし、全てのフォントが、サロゲート文字をサポートするわけではありませんので、フォント依存の文字であることをあらかじめご承知置きください。

UNICODE テーブルの作成に関しましては、マニュアルにおいて、InDesign の「字形」パネルを使用した方法を説明しておりますが、WindowsOS の VISTA 以降では、MS-IME においても IME パッドを利用して入力することが可能となっておりますので、InDesign を使用することなく、SpicyLibracs 上のテーブルエディタを使用して入力することが可能となりました。



上図が、新しい UNICODE 変換テーブルエディタです。

「UNICODE 文字」項目に変換先の文字を入力する場合、IME を使用して入力・編集することが可能ですが、1文字に限られます。

なお、フォントによっては、サロゲートペア文字のサポートが異なりますので、InDesign の実際の組版で使用するフォントがサロゲート文字をサポートしていることをご確認のうえ、「UNICODE 文字表示フォント変更」にて、その使用されるフォントを設定のうえ、ご使用ください。ご注意ください。ご注意していただかなければならないのは、小塚明朝・ゴシックなどは、サロゲート文字をサポートしておりますが、Windows のフォントダイアログコントロールでは、利用できずリストに表示されません。このように、InDesign では利用できるフォントも、本エディタでは利用できない場合があります。この場合には、サロゲートペア文字の割り当てが同じようなフォントを選択していただくか、表示が「□」になってしまうことをご理解の上ご利用ください。

③ UNICODE 愛用領域文字テーブルコード変換用変換テーブル作成

UNICODE の使用領域は、外字の登録エリアとして使用されるケースが多いため、人名外字を独自に登録しているような場合、顧客ごとに外字コードが異なる場合が発生し、混乱をきたすことがあります。

本機能は、UNICODE 私用領域内の文字コードの変換テーブルの作成とコード変換機能をユーティリティとしてサポートいたします。

そのための、変換テーブル作成機能を追加しました。

④ 標準人名字取でのモノルビのサポート

従来、カスタム人名字取ではグループルビ・モノルビの両方をサポートしていましたが、標準の人名字取ではグループルビのみがサポートされていました。

今回、標準人名字取においても、モノルビをサポートいたしました。

ルビ文字を、対応する親文字に従って半角「/」にて区切って入力することで、モノルビとして処理します。ただし、親文字が1文字しかない場合には、グループルビでの処理となります。

例えば、「吉^{よしだ}田」とモノルビで振る場合には、ルビ文字は「よしだ」とします。

また、「城^{じょう}の内^{うち}」とふる場合には、「じょう//うち」とします。

複数の親文字に対してモノルビを振る場合、ルビを振らない文字についても、「/」で区切って、「//」などとし、「親文字数 - 1」の区切り文字を指定する必要があります。

なお、区切りの「/」が親文字より多い場合には、該当する親文字の数分を先頭より逐次使用し、あまったルビ文字は利用しません。逆に、「/」が不足している場合には、不足する部分の親文字には、ルビは振られません。

このサポートにより、標準人名字取及びカスタム人名字取のいずれにおいても、モノルビとグループルビの使用が可能となりました。

⑤ カスタム人名字取における異体字指定の囲み記号の追加

カスタム人名字取では、親文字の直後に特定の記号で囲んだ文字コードを設定することで、親文字を異体字などに変換することが可能となっています。

その変換する文字コードを囲む記号は、基本的には、半角の「<>」で行うことになっていますが。処理データを XML とする場合、XML タグとして扱われてしまうため、不具合が生じます。そのため、半角の「<>」以外にも、全角の「<>」及び半角の「[]」を代用の記号として使えるようになっております。

今回、さらに、この代用の記号の記述方法に、xml での文字実体参照を利用した、「<」と「>」を使用できるようにしました。

例えば、吉<20BB7> の代わりに、<20BB7> を使用できるようになります。

⑥ 標準人名字取及びカスタム人名字取処理で、UNICODE の私用領域(Private Use Area) の範囲 (U+E000 ~ U+F8FF) にある文字の自動フォント切替

UNICODE の私用領域は、Shift-JIS コードにおける外字エリアに該当し、レガシーのデータでは、この領域に多数の外字を作成して利用している場合があります。

ところが、いわゆるリンク外字フォント（親フォントにリンクする形で結びついている外字フォント）である EUDC などは、Word など Microsoft 系のアプリケーションでは、問題なく表示できるのですが、InDesign など Adobe 系のアプリケーションでは、使用できないフォント形態となります。

Adobe 系アプリケーションでは、親フォントにリンクする形式のフォントではなく、単独のフォント形式でなければならないということになっています。

つまり、リンク外字フォントでは、InDesign に表示される外字は、ドキュメント上に表示できないということになります。

従って、レガシーのデータで使用していた外字フォントは、TTEdit 等を使用して、1つの単独フォントとして作成し使用することになります。

この単一の外字フォントを作成する上で問題があり、外字として作成された文字は、既存のフォント（例えば、MS 明朝や小塚明朝など市販のフォント）の私用領域には、ほとんどの場合コピーできません。すなわち、既存のフォントに埋め込んで、同一のフォント名でアクセス使用することができないということになります。従って、例えば、TTEdit などを利用し、外字フォント作成用の全文字フォントを用いて、外字部分をコピーするというようになります。

本来、外字を埋め込んで使用したいフォントとは別の、外字専用の単独のフォントとして利用しなければならないということになります。

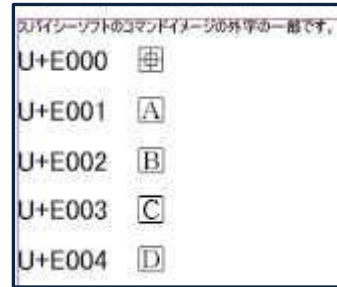
そのため、ドキュメントに使用する外字が、きわめて少数である場合には、手動にて当該文字を選択しフォント切り替えを行えば問題はありませんが、クライアント供給のデータの様に、外字も内字も区別ない単純な文字列として扱わなければならない場合、データ量が多く、なおかつ使用されている外字の数が多ければ、それらを探してフォント切替えを手動で行うのは、現実的には不可能なことと言えます。

つまり、クライアントサイドが、外字を含めた1つの完全なフォントとしてフォントを供給していただければ問題はありませんが、そうでない場合には、内字の文字部分の一般的なフォントに対して、外字部だけのフォントを作成し、データには存在しない書体切り替えを施して外字フォントを使用しなければならないこととなります。

データ中の外字を検索し、編集システムにあった書体吉替えの動作をさせないといけないということです。

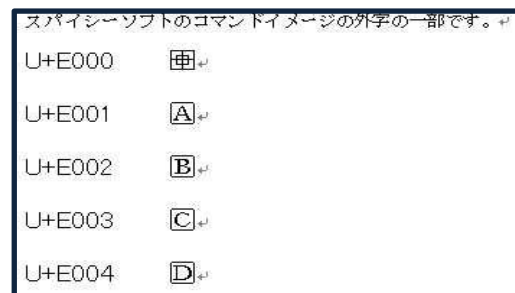
例えば、弊社が作成したコマンド組版用のコマンドイメージのフォントは、TTEdit で作成、リンク形式フォントとして Shift-JIS コードの外字エリアにマッピングして作成しました。

●右図は、リンクフォントにて、Word
での表示です。

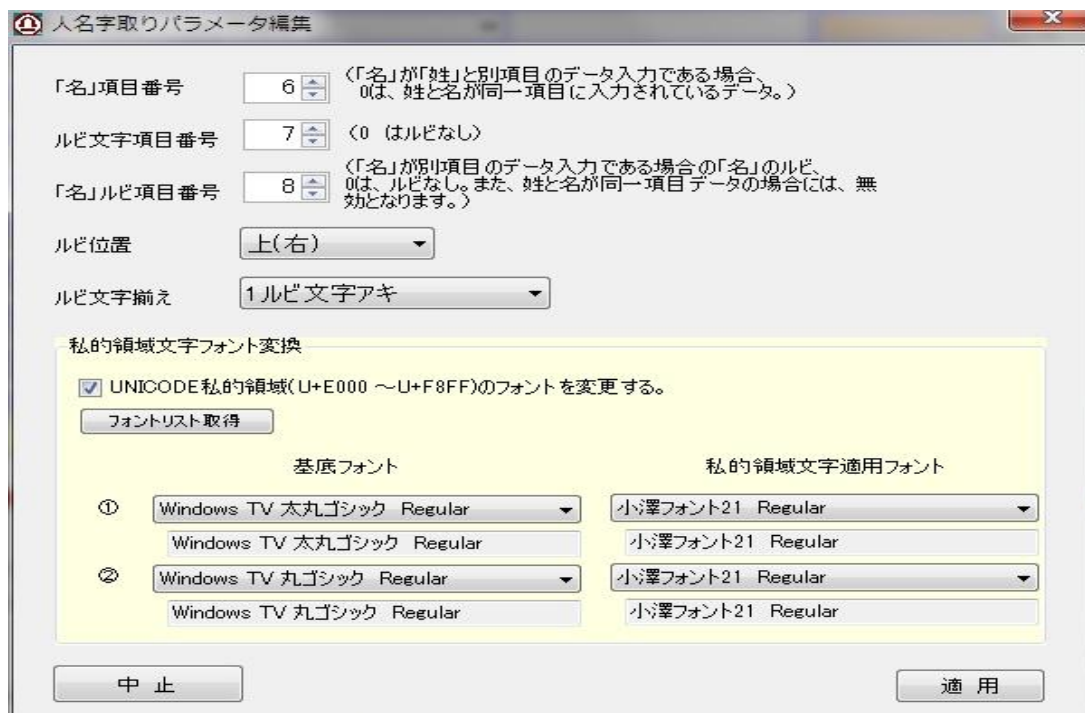


●同じデータを InDesign で表示したものです。

左がリンクフォント形式で、右が1フォント形式でフォント変更したものです。



このように、インデザインでは、リンク形式の外字フォントは使用できません。また、1フォント形式の外字フォントは、表示されますが、外字ごとに書体の切り替えを行わなければなりません。SpicyLibraCS では、外字の使用頻度の高い人名処理に、この外字（私用）領域の文字に対して自動的に書体変更を行うように、処理パラメーターを追加しました。次図は、標準（5字取、7字取）人名字取のパラメーター設定画面です。



また、次図は、カスタム人名字取の処理パラメーター設定画面です。

いずれの設定画面でも、画面下部に「私用領域文字フォント変換」の設定項目が設けられています。

私用領域の文字（外字）が、人名字取処理の設定されたテキストフレームに出現した場合に、「UNICODEの私用領域(U+E000 ~ U+F8FF)のフォントを変更する」チェックボックスにチェックをすることで、チェックボックスの下のフォント選択コンボが

ックスで選択したフォントを、当該領域の文字に適用します。

フォント選択のコンボボックスは、インデザインのアプリケーションが持っているフォントのリストを取得しておかないと有効にはなりません。

従いまして、初めてこのパラメーターを設定する場合には、「フォントリストの取得」ボタンをクリックし、**InDesign** よりフォントリストを取得しておく必要があります。

取得したフォントリストはテキストファイルとして保存しますので、新規にシステムにフォントをインストールしたり、フォントを削除しない限り、再度のフォントリスト取得の必要ありません。

フォントリストを取得すると、フォント選択コンボボックスが使用可能になりますので。変換するフォントを選択します。

フォント選択の部分は、次のような構成となっています。

【基底フォント】側のフォント選択では、私用領域以外の内字の文字に適用されているフォントを選択します。

【私用領域文字適用フォント】側のフォント選択では、上記の基底フォント内で出現した私用領域の文字に対して適用するフォントを選択します。

基底フォントが適用されていない文字は、私用領域内の文字であっても、「私用領域文字適用フォント」は適用されません。

SpicyLibraCS では、同時に、2つの基底フォント内の私用領域文字に対して、各々別個のフォントを選択することができます。

選択したフォントは、フォント選択コンボボックスの直下のテキストボックスに表示されます。

なお、このフォントリスト取得の操作で **InDesign** より得られるフォントのスタイル名は、**InDesign** のアプリケーション画面で表示されるスタイル名と異なる場合がありますので、注意してください。

スタイルが複数あるフォントでは、フォントファミリー名+スタイル名が、それぞれ正しく表示されますが、スタイルが1つしかないフォントで、**InDesign** のアプリケーション画面では、スタイルが、例えば、「**Extra-Bold**」の用に表示される場合でも、フォントリストでは、「**Regular**」と表示されますので、ご注意ください。

この設定により、**SpicyLibraCS** にて、私用領域の文字は設定されたフォントに自動的に変更されますので、クライアントから供給されたデータは、そのまま、つまり書体切り替えに対する操作を何ら施すことなく、そのまま内字の文字と私用領域文字とを混在したままで使用できるということになります。

また、人名字取以外のテキスト挿入に関しては、ユーティリティ機能にて、私用領域文字を検索して、**SpicyTag** の文字スタイルや書体指定タグを挿入する機能（後述）を追加しましたので、処理するデータにあらかじめフォント切り替えのタグを挿入して処理することが可能です。

⑦ SpicyTag におけるカスタム人名字取タグの外字処理追加

カスタムの人名字取タグの属性に「gaijifont」を追加しました。U+E000 ~ U+F8FF にある外字に、gaijifont で設定したフォントを適用します。

< gaijifont="小澤フォント 21¥tRegular">のように、「フォオンとファミリー名 + ¥t+ スタイル名」で私用領域文字に適用するフォントを指定します。

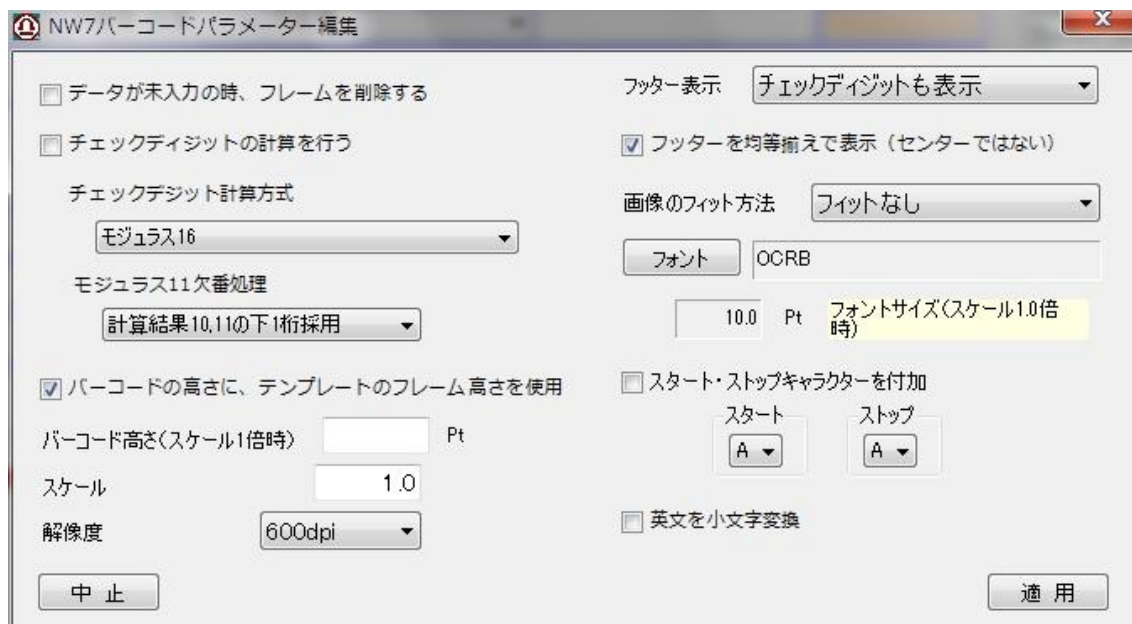
⑧ NW7 バーコード処理機能追加（画像・フォント）

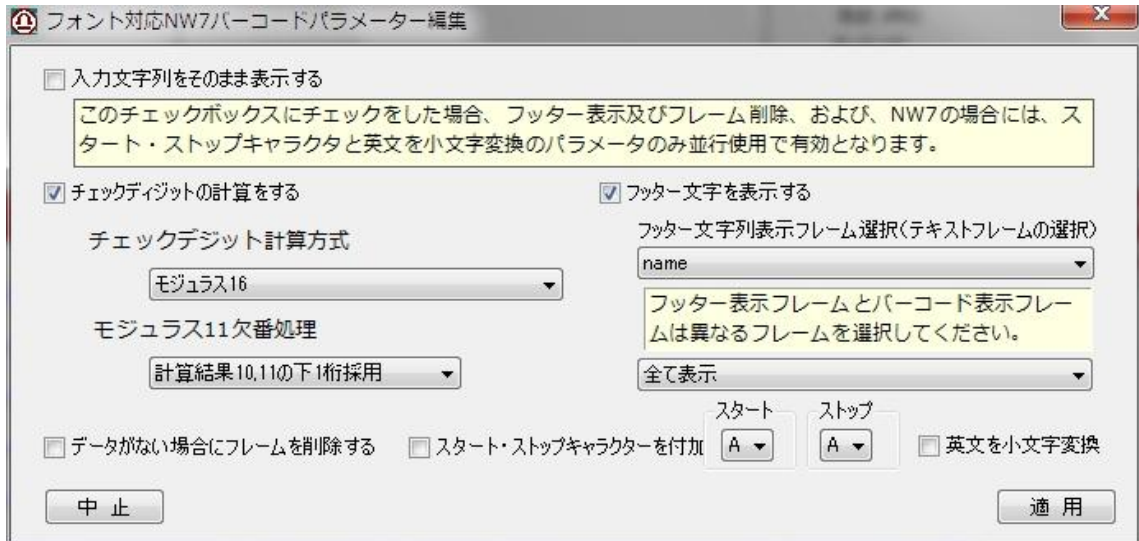
これまで、NW7 のバーコードを処理するに際しては、スタートキャラクター・ストップキャラクターがデータ中にない場合に、バーコード処理を行わず、エラーとして処理を行いエラーメッセージをログファイルに書いておりました。

今回、スタートキャラクター・ストップキャラクターの内データの場合に、エラーとせずに、パラメーターで設定したスタートキャラクター・ストップキャラクターを挿入し、バーコード処理を実行するようにしました。

また、NW7 においてチェックでじっと計算を行う場合、モジュラス 16 方式の身をサポートしておりましたが、モジュラス 11、モジュラス 10、7 チェック、9 チェックなど多様な計算方法を選択できるように拡張いたしました。

次図は、NW7 のパラメーター設定画面（画像版、フォント版）です。





画面下部の「スタート・ストップキャラクターを付加」のチェックボックスにチェックを入れることで、スタート・ストップキャラクターの内データに、スタート・ストップキャラクターを付加して、処理を続行します。

このチェックボックスにチェックがない場合には、スタート・ストップキャラクターがないデータは、これまで通りエラー扱いとなります。

付加するスタート・ストップキャラクターは、「スタート」・「ストップ」とタイトルがつけられたコンボボックスにて設定します。

設定できるスタート・ストップキャラクターの値は、「A～D」の4種類の文字から選択します。

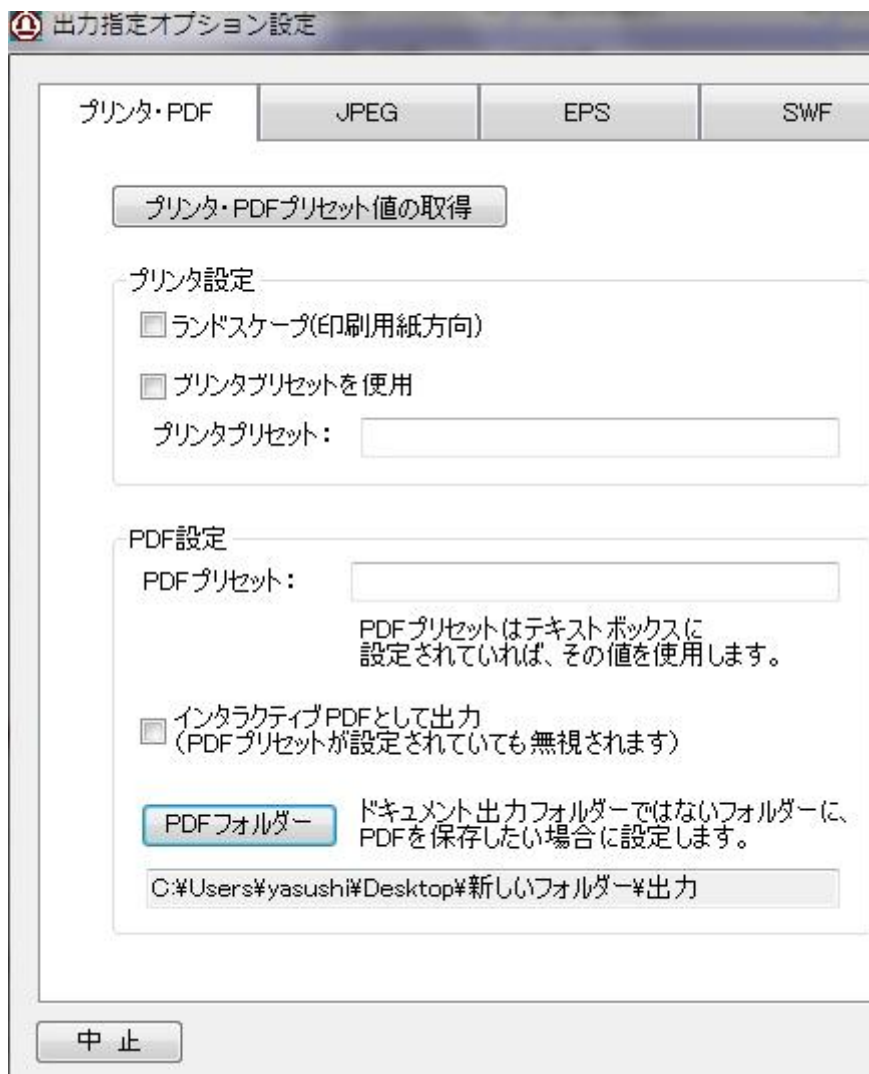
なお、スタート・ストップキャラクター選択のコンボボックスでは、大文字のみの選択となりますが、小文字として挿入したい場合には、「小文字に変換して挿入」チェックボックスにチェックを入れておきます。

チェックデジット計算方法によっては、計算結果が2桁となる場合があり、1桁のチェックデジットに置き換える方法も選択可能としています。

⑨ PDF ファイル出力先フォルダーの変更機能の追加

従来、PDF 作成の指定をした場合、PDF ファイルは、定義ファイルで設定された InDesign のドキュメントファイル作成保存フォルダーと同一となっていました（ただし、ホットフォルダー使用の場合には、処理命令ファイルで PDF ファイルの作成先を別個に設定できます）。

このたび、出力オプションの PDF プリセットなどの設定欄に、PDF ファイルの作成保存先フォルダーを指定できるようにしました。



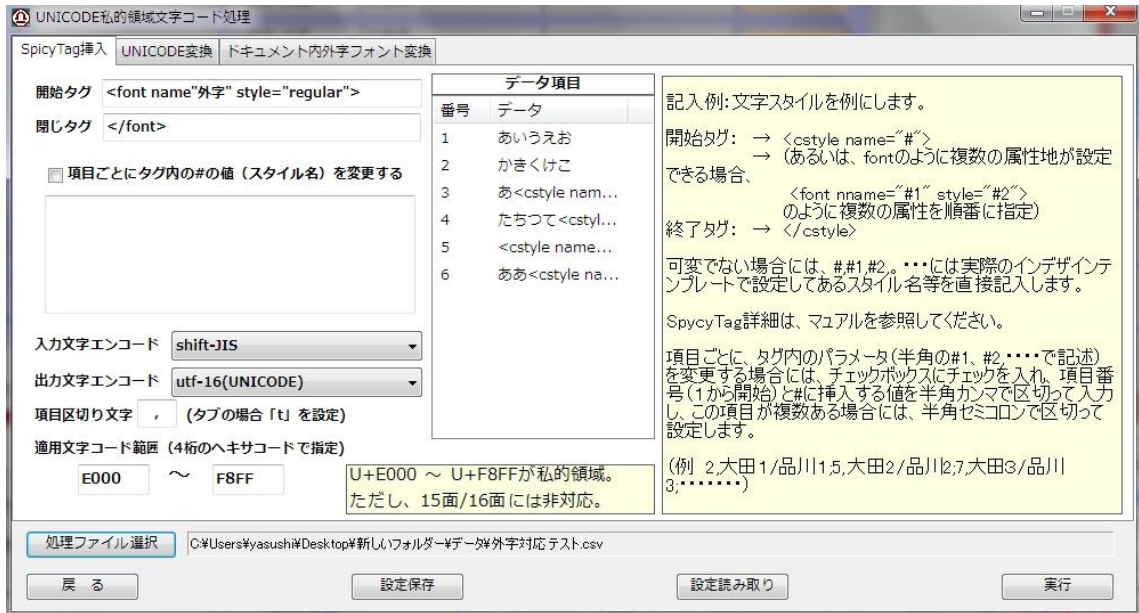
上図の下部にある「PDF フォルダー」のボタンをクリックし、PDF ファイルを書き出すフォルダーを選択設定します。

⑩ 外字ユーティリティ処理の追加

ユーティリティの処理に外字に関する 3 種類の機能を追加しました。

ユーティリティのメニューの「外字処理 (o)」サブメニューにて、タブコントロールで 3 種類の処理機能を使用することが可能です。

(1) SpicyTag 挿入



処理する CSV または TSV ファイル中の UNICODE の私用領域文字を検索し、設定された SpicyTag で囲んで出力します。

私用領域の文字列が、項目区切りを挟んで連続する場合、一旦、項目区切り文字の前で、SpicyTag を閉じ、次の項目データの先頭に、開始の SpicyTag を挿入します。

挿入する SpicyTag は「開始タグ」と「終了タグ」のテキストボックスに設定します。項目ごとに、設定した SpicyTag 内の属性地を固定で挿入したい場合には、データの全項目が対象となります。

例えば、開始タグとして<cstyle name="外字">、終了タグとして</cstyle>を設定してあれば、

あいうえお<cstyle name="外字">あいうえお</cstyle>、<cstyle name="外字">あいうえお</cstyle>

のように、単純に、検索された私用領域文字列を設定した SpicyTag で囲んで出力します。

これに対して、適用項目を指定したり、SpicyTag 内の一部を可変にしたい場合には、設定する SpicyTag 内の可変項目を#1 から、#2,#3、・・・という具合に増加させたプレースホルダーの字列を挿入して指定します。

例えば、SpicyTag で書体切り替えを 1 項目目と 3 項目目にしたい場合を考えます。開始タグは、、終了タグは、</font.>になります。

そして、検索対象の項目番号と、#1,#2 のプレースホルダーに挿入する値は、「項目ご

とにタグ内の値、(スタイル名)」を変える」チェックボックスにチェックを入れ、その下のテキストボックスにて、指定する値を設定します。

1,MS明朝/標準;3,小塚ゴシック Pro/R

のように、

項目番号 + 半角「,」 + #1 置換文字列 + 半角「/」 + #2 置換文字列 +
半角「;」 + 項目番号 + 半角「,」 + #1 置換文字列 + 半角「/」 +
#2 置換文字列

の形式で記述します。

処理するデータの文字エンコード及び処理したデータの出力エンコードを、それぞれ入力文字エンコード・出力文字エンコードのコンボボックスにて選択します。選択可能なエンコードは、Utf-16(LE)及び Shift-JIS です。

Shift-JIS に出力する場合には、対応する Shift-JIS の範囲内か注意してください。

また、本処理では私用領域内の範囲も適用文字コード範囲で設定することが可能です。

なお、データ項目の欄は、処理ファイルを選択したときに、選択されたファイルの1レコード目の項目を参考にするために表示します(具体的な処理とは関係ありません)。

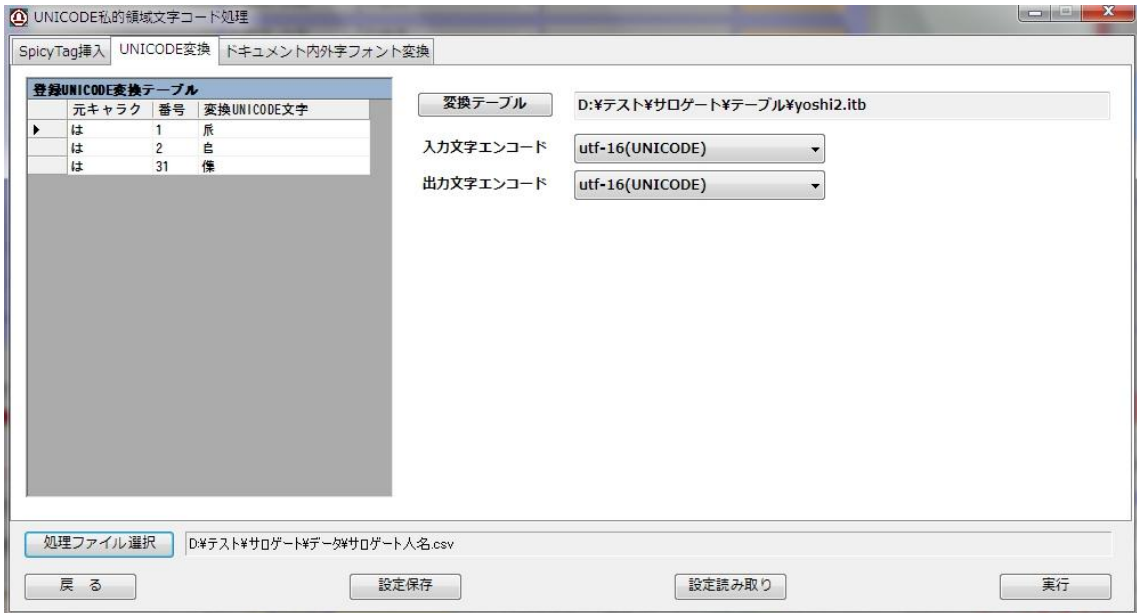
画面最下部の4つのボタンは、多義コントロール各画面で共通となり、「戻る」ボタンは、ユーティリティ画面を閉じ、spicyLibrCS のメイン画面に戻ります。

「設定保存」ボタンは、画面にて設定した値をファイルに保存します。

「設定読込」ボタンは、保存した設定ファイルから値を読みだして画面に表示させます・

「実行」ボタンは、処理を実行します。

(2) UNICODE 変換



UNICODE 変換は、spicyLibracs の UNICODE 変換テーブルを使用して、あらかじめ、処理データに対して変換テーブルを使用した変換を施したデータファイルを作成します。

従いまして、spicyLibracs のテーブル作成メニューから、UNICODE 変換テーブルを事前に作成しておく必要があります。

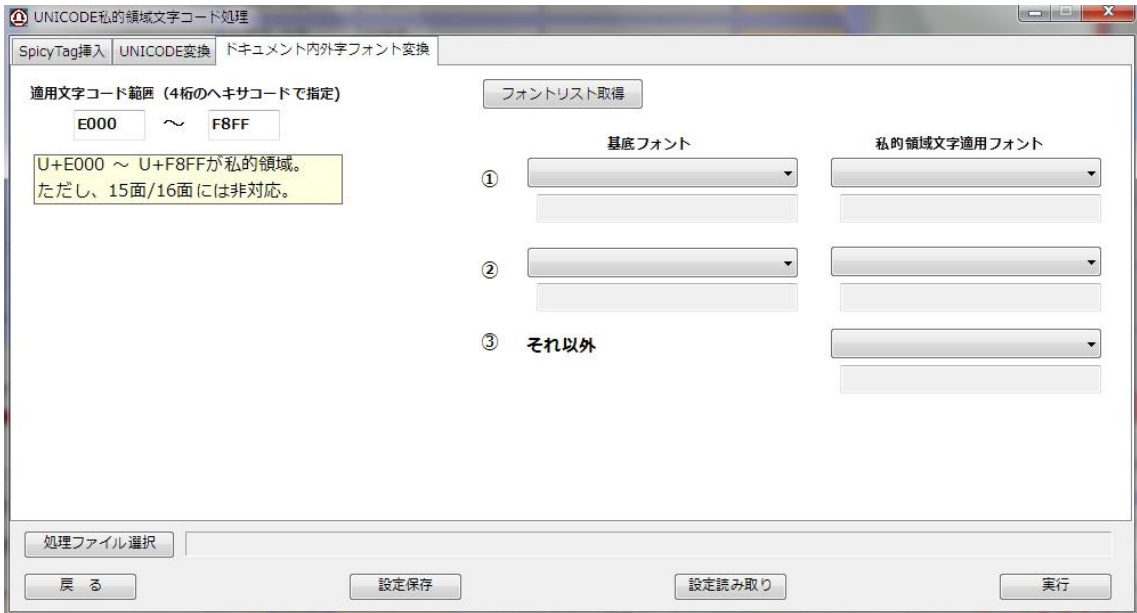
「変換テーブル」ボタンにて、変換に使用する UNICODE テーブルファイルを選択します。選択されたテーブルの内容は、画面左のグリッドテーブルに表示されます。このグリッドテーブルは表示のみで、編集などはできません。

入力文字エンコード及び出力文字エンコードのコンボボックスにて、入出力ファイルの、それぞれの文字エンコードを指定します。設定できるエンコードは、Utf-16(LE)及び Shift-JIS の 2 種類となります。

処理ファイルを選択し、「実行」ボタンをクリックして処理を実行します。

その他のボタンは、(1) で説明したとおりです。

(3) ドキュメント内の私用領域文字フォント変換



この処理は、(1)、82)の処理が、spicyLibrCSの処理を行う前のファイルに対するものであったのと異なり、すでに、何らかの方法でInDesignドキュメントになったドキュメントファイルを指定して、その中に含まれるUNICODE私用領域に該当する文字を検索し、フォント変更を行うものです。

本処理は、ドキュメントのStoryで管理されるすべての文字を読み取りチェックするため、時間がかかる処理となりますので注意してください。

適用文字コード範囲をUNICODEの私用領域範囲の中で設定します。

次に、適用するフォントを設定します。InDesignよりフォントリストを取得していない場合には、フォントリストを「フォントリスト取得」ボタンをクリックして取得しておきます。

基底フォント欄では、該当する私用領域文字が適用されているフォントをコンボボックスにて設定します。

この基底フォントが適用されている私用領域文字に対して、あらたに適用するフォントを私用領域適用文字の欄にて設定します。

基底フォントおよびそれに対応した私用領域適用フォントは2組まで設定できます。

また、基底フォントの欄にて設定されていないフォントに私用領域文字があった場合にも、適用フォントを変更する場合には、「それ以外」の行にある私用領域文字適用のフォント選択コンボボックスにて、適用するフォントを選択しておきます。

その他のボタンの機能は、(1)で説明したとおりです。

(4) UNICODE 愛用領域文字テーブルコード変換

変換テーブルを用いて、UNICODE 愛用領域内の文字コードの変換を行います。

2011/12月アップデートでは、次のように、物流バーコードの新たな世界標準として普及を始めた、GS1 DataBarを中心に、バーコードのサポート種を多雨生かしました。

- ⑪ ITF バーコード (フォント)
- ⑫ MicroQR コード
- ⑬ ISBN 書籍バーコード
- ⑭ 定期刊行物バーコード
- ⑮ GS1-128(旧 EAN128)バーコード
- ⑯ GS1 DataBar バーコード
(Standard, Truncated, Limited, Expanded, Stacked, その他)

【機能修正】

- ① 積み木表処理
積み木表機能において、縦揃え（横組み時）、左右揃え（縦組み時）の設定は、テンプレートにて対応するテキストフレームの「テキストフレームの設定」で指定することで、表にデータを挿入後の表の揃えを実現しています。
ところが、InDesignCS5以降、「テキストフレームの設定」ダイアログに「列を揃える」チェックボックスが追加され、このチェックボックスにチェックがされていない場合、揃えを「中央」にしても、SpicyLibraCSにて処理した表が、中央に揃わないという現象が報告されました。
「列に揃える」にチェックがある場合には、きちんと揃えが有効となりますが、そうでない場合には、揃えが不定となります。
そのため、表にデータを挿入後、強制的に、表を挿入しているテキストフレームの揃えを強制的に再設定するようにプログラムを修正しました。
- ② ホットフォルダー機能整備
ホットフォルダーを使用する場合、処理命令ファイルにて設定される「プレビュー情報」、「出力ファイル」の設定の組み合わせで、作成されるファイルが、どのフォルダーに保存されるのかなど、一部、新規に作成するフォルダー名などに紛らわしい点がありましたので、これを統一しました。
この組み合わせの一欄は、別紙「SpicyLibraCS ホットフォルダー処理でのコマンドファイル設定と出力ファイルの関係一覧表.pdf」にまとめてあります。

【機能説明補充】

① 住所漢数字変換

住所漢数字変換機能は、住所データを縦組みで行う場合に、データ中の算用数字を漢数字に変換する機能となっております。

同時に、「住所縦組変換テーブル」を用意することで、InDesignにて自動的に横組み文字→縦組み文字に変換しない文字であっても、テーブルに設定することで、処理データ中の文字を変換して使用することが可能となっております。

その「住所縦組変換テーブル」編集画面にて、「2桁数字等に十を使用する」というチェックボックスがあり、そのチェックボックスをチェックすることで、2桁算用数字から漢数字に変換する場合に、桁数字「十」を使用した返還を行う事を可能としております。

従いまして、2桁数字の変換は、以下のようになります。

- 10 → 通常は、 一〇 と変換。
チェック時は、 十 と変換。
- 20,30,40,・・・ → 通常は、 二〇,三〇,四〇,・・・ と変換。
チェック時は、 二十,三十,四十,・・・ と変換。
- 11～19 → 通常は、 一一,一二,一三,・・・ と変換。
チェック時は、 十一,十二,十三,・・・ と変換。
- 21～29 (31～39 など) → 通常は、 二一,二二,二三,・・・ と変換。
チェック時は、 二十一,二十二,二十三,・・・ と変換。

以上